

R・コーエン編

『アフリカの食料需要の充足
——アフリカの農業における食料生産
と商業化——』Ronald Cohen 編, *Satisfying Africa's Food Needs: Food Production and Commercialization in African Agriculture*, ポールダー,
Lynne Rienner Publishers, 1988年, xii+240ペ
ージ

児玉谷史朗

I

1980年代にアフリカの農業問題や食料問題が深刻化して以来、その原因や解決策をめぐって学界や援助関係者の間で議論が行われてきた。本書もアフリカの食料危機や農業危機を意識して書かれた論文集である。1980年代のアフリカ諸国の経済危機の原因をめぐって、国際的要因や歴史的要因を強調する議論や国内的な政策・制度の不適切さに原因を求める見解が出されてきた。農業問題、食料問題はアフリカの経済危機の中心に位置するが、アフリカに対する援助に大きな影響力を持つ世界銀行は、農民の生産意欲を阻害する価格政策、非効率な営農の農産物流通組織、農業を軽視した開発戦略などの政策・制度的要因を農業生産の停滞を招いた要因として重視するようになってきた。

しかし、これこそがアフリカの食料危機の原因であり、それゆえこれこそ食料問題の解決策であると自信を持ってアフリカに勧告できるほど、アフリカの外部にいる者はアフリカの現実を知っているであろうか。本書を読めば、むしろアフリカ諸国の政府にいる者も含め人々が複雑で多様な、そして他の地域とは異なるアフリカの現実を十分に理解せずに既存の開発理論や技術をアフリカに無条件に適用してきたことこそ、アフリカの危機の原因ではないかと思えてくる。その意味で本書は単純化・一般化された原因論、解決策に再考を促すものである。序文にも述べられているように本論文集は全体として統一的な見解を提示しているわけではないが、ユニークな主張や事例を展開している論文が多く、アフリカの農業問題について読者に新たな視点を与えている。また各論文の主張の相違は結果的にこの問題の複雑さや多面性を明らかにしているともいえる。

II

本書の構成と内容を紹介しよう。本書は以下の9章からなる。

- 第1章 「序——アフリカの食料生産の指導と誤った指導」(R・コーエン)
 第2章 「アフリカの食料生産促進の優先順位の設定」(C・L・デルガードウ)
 第3章 「アフリカの飢餓を越えて——モノカルチャーの呪縛を破る」(G・ハイデン)
 第4章 「アフリカの農業にとっての中国の教訓」(M・F・ロフチェ)
 第5章 「ケニアにおける旱魃と飢饉」(R・H・ベイツ)
 第6章 「ケニアにおけるミラーの生産と流通」(P・ゴールドスミス)
 第7章 「ケニアにおける食料余剰生産、富、農民の戦略」(A・ホージェラッド)
 第8章 「構造調整への対応——ナイジェリアの経験」(A・L・マボグンジェ)
 第9章 「逆境と変革——トンネルの出口の見えてきたナイジェリア」(R・コーエン)

第1章から第4章までの前半部分がアフリカ全体を論じた総論的部分、第5章以下の後半部分が個別の事例を扱った各論である。しかし後半の各章で扱われている国はケニアとナイジェリアだけである。

第1章のコーエン論文は、これまでアフリカ諸国の政府や援助機関の政策を支えてきた開発理論がアフリカの現実に直面して無力であったためにアフリカの食料問題を解決できなかったとする。コーエンは1960年代、70年代に支配的であった開発理念を「解放」理論と名づける。「解放」理論は資本主義の浸透に対抗するために国家の介入によって平等な分配や小農民の解放を実現しようとした。しかし低開発と闘い、大衆の利益のために資源を分配するという大きな役割を果たさずだったアフリカの国家は、実際には例外なく浪費、腐敗、非効率を伴う「軟性国家」であったために、この役割を果たせなかった。また農業開発戦略において、小農に資源を集中的に投入する「単層式(unimodal)モデル」は、決定要因が状況によって変化し、十分に理解されていない場合、危険である。現実の世界は、状況に対して中立的な不変的關係と状況依存的な可變的關係の両方からなっており、特にアフリカでは未知の要素が多いので、単層式

モデルのような一般化されたモデルを唯一の解決策として実施しようとするとうまく失敗する。むしろいくつかの可能な解決方法を実験して、その結果から学ぶ「多層式(multimodal)モデル」あるいは「実験的モデル」に基づく開発戦略の方が危険が少ない。このようにして多層式モデルの優位性を主張した後に、コーエンはアフリカの食料生産を条件づける要因として、人口の動態と「ソフトな」政府という2つの不変要因および土地、生産性、階層分化、商業化という4つの可変要因をあげる。結論として、成長重視の戦略と公正・福祉重視の戦略はどちらも完璧なものではないとする。結局コーエンは食料生産の増大という目標を達成するためには、ある程度の公正や福祉の犠牲はやむを得ないことを指摘している。

第2章は食料問題を長期的に解決する戦略として、価格の歪みを是正する戦略と農業に対する財政支出を増加する戦略の2つを比較し、後者の戦略の重要性を強調する。第2章の筆者によれば、農民に対する誘因の改善には、価格の歪みの是正による生産者価格の引き上げだけでなく、農業生産コストの引き下げも重要である。道路、農業研究などの公共財の供給は生産コストの引き下げに資する。しかし限られた資源のもとでは公共投資の優先順位の設定が必要なので、大農場よりも小農に焦点をしばり、狭い地域に投資を集中し、政策で支援する作物を限定する。総合農村開発計画のようなやり方ではなく、政策的介入は2、3の重要な点に限るべきだとする。

第3章の「アフリカの飢餓を越えて——モノカルチャーの呪縛を破る」でハイデンは、モノカルチャーという言葉を一作物の耕作とか単一産品への依存という意味以上に広い意味で用いて、アフリカの危機の原因を探究している。ハイデンによれば、アフリカの危機はアフリカ自体の自然的限界というよりは、援助機関や政府の技術に対する過信から生じた。援助機関はアフリカの開発の歴史的な脈や、自然的・文化的現実に対して限られた知識や理解しか持っていない。そしてヨーロッパなどアフリカ以外の地域における経験から得られた考えをアフリカに無批判に適用してきた。これがアフリカの危機を招いたというのである。ハイデンは次の3つの命題を提示する。(1)アフリカの指導者がとった開発戦略はアフリカ以外の地域でしか実現可能性を証明されていない前提に立つものであった。(2)アフリカは、自然はコストなしに改造できるという産業社会の見方を採用し、予見不可能な環境で開発を行なう場合のリスクを軽視してきた。

(3)変化や多様性を削減し、専門化や標準化を進めようとしてきたが、それに伴う潜在的な脆弱性が見過されてきた。

植民地化以前のアフリカの農業システムは予測不可能な状況での生存を重視する特質を持ち、弾力的でたくましかった。植民地支配の過程で、モノカルチャー的農業観が支配的になったが、これは市場での競争や地域の生産者による内側からの生成の結果選択されたのではなく、政治的支配の結果、上から導入された。独立後もアフリカの指導者は先進工業国で支配的な開発の考え方を重視し、影響力の大きい援助機関もヨーロッパ中心的な見方をとっていた。アフリカの農業危機に対しては、世界銀行などの援助機関は伝統的な農業の不十分さを指摘し、生産の近代化と輸出の促進を勧告した。しかしアフリカが単一の作物の輸出に依存している限り、つまり需要が外的なものである限り、農業の成長が発展のエンジンとして働くのは困難である。またアフリカ以外の地域で行なわれた研究の結果普及した領域や方法に解決策を求めても、それを持続的に実施するのは困難である。アフリカにとっての飢餓を越えた未来は、モノカルチャーの呪縛を破り、アフリカ自身の資源と自発性をもっと利用することにある。最善の環境では高い収益を与えるが、次善の状況では弱点が拡大し、失敗の確率が高まるような新技術は予測不可能な環境ではリスクが大きい。

第4章のロフチェ論文は、1960年代、70年代に農業の停滞に悩んでいた中国が70年代末から80年代前半にかけて生産責任制の導入によって農業増産に成功した例を引き、そのアフリカへの教訓を説いたものである。ロフチェによれば、中国の「農業革命」の成功は農民の増産努力に報いるような経済誘因の体系の導入によるのであり、それは自由市場価格と結び付けられた新しい価格モデルによって行なわれた。それは自由市場制度の全面的な導入ではないが、重要なことは市場制度が生産者への誘因として機能することであり、このことがアフリカにとって教訓となるという。

第5章のベイツ論文は、ケニアのマーケティング・ボードのトウモロコシ買い付け量、ストックと雨量の関係を分析し、通常想定されている、早魃→買い付け量の減少→トウモロコシ粉の販売の減少という関係がケニアでは存在しないことを明らかにしている。むしろ早魃の時にマーケティング・ボードのトウモロコシの販売量は増大するのである。そのメカニズムは、次のようなものである。雨量が平年よりも35%程度減少した場合、平年雨量の多い地域にある大農場のトウモロコシ生産はあまり

大きな打撃を受けず、マーケティング・ボードへのトウモロコシ出荷量はさほど変化しない。他方、平年雨量の少ない地域にある小農のトウモロコシ生産は大きな影響を被る。しかし小農のトウモロコシ生産のうちマーケティング・ボードに販売される割合はもともと小さい（多くは自家消費されるか地場市場で販売される）ので、マーケティング・ボードのトウモロコシ買い付け量には大きな影響を与えない。ところが、旱魃による生産の減少で、小農はトウモロコシの自給や農村の地場市場での購入ができなくなるので、マーケティング・ボードの販売するトウモロコシから加工されたトウモロコシ粉を商店から購入するようになる。こうしてマーケティング・ボードのトウモロコシに対する需要が急増し、マーケティング・ボードのトウモロコシ販売量が増加するのである。

第6章のゴールドスミス論文は、アフリカにおける商業的農業のなかでも特異な事例としてケニアのメルにおけるミラー（覚醒作用を持った薬）の生産を取り上げている。ケニアのミラーの生産と流通は他の換金作物の場合とは異なり、植民地支配によって外部から導入されたり、政府主導の開発プログラムで上から進められたのではなく、自生的に発展した。生産技術も流通組織も土着の社会・経済的組織に基づいて自生的に発展したのであり、国営のマーケティング・ボードや国の研究機関の開発した改良品種や、外国の援助は全く関係していない。ここで示されているのは、「情の経済」の原理で動いているが、生存維持経済に退却するのではなく、市場経済に参加している小農社会の事例である。

第7章のホージェラッド論文は、ケニアのエンブにおける調査をもとに、小農の食料生産水準の季節的変動と農家間の差異を検証している。それを通じて、「自給自足（生存維持）指向」という言い方では覆い隠されてしまう経済的複雑さと多様性を明らかにしている。同論文によれば、小農の農業経営には自給自足指向があるとしても、それは伝統に縛られて市場の誘因に反応しないとか、生産能力が様に低いとかを意味するのではない。むしろ、それは市場や国家の制度や政策が不確実なことに対する対応である。制度的不確実性のために農民は、少数の商品作物に特化するよりも経済活動を多様化することでリスクを減らそうとするという。ホージェラッドは通常小農として一括されている農民は実は同質の集団ではなく、所有地規模等に大きな差異があることを示している。ほぼ恒常的に食料作物の余剰を生産できる農民とそうでない農民がおり、両者は異なった社会・経済的

特徴を有している。食料作物の余剰を生産している農民は単に余剰を販売して現金収入を増やすだけでなく、その余剰を農業労働者への現物支給、親族等への贈与、客人にふるまう食事などに用いることで地域における政治的・経済的・社会的地位を維持しているのである。

ナイジェリアはIMFの構造調整計画は拒否したが、1986年に自前の構造調整計画を開始した。第8章のマボグンジェ論文はこの新政策が都市と農村に与えた影響を分析している。都市では輸入の禁止や輸入価格の高騰に伴い、パンなど輸入に依存する食料や飲料からナイジェリアで生産される食料への消費の転換が起こった。都市での生活が困難になった都市住民がパートタイムで農業生産を始めるようになり、富裕な都市住民も食料作物の生産者価格の上昇に引かれて大規模農業経営に参入し始めた。マボグンジェによれば経済危機と新政策による変化の過程でナイジェリア人のなかに取り引きや流通を重視する精神に代わって、生産や生産性を重視するエートスが現われつつあるという。

第9章は、コーエンが今度は各論としてナイジェリアの事例を取り上げている。コーエンは、食料問題についてアフリカの失敗例ばかりが分析されてきたが、成功例を分析することが重要だとして、1980年代におけるナイジェリアの食料政策の成功を分析している。コーエンはナイジェリアの政策的対応が多層的、多層的であったことに成功の原因を求めている。すなわち小農を対象とした開発計画、大規模な商業的農場に対する支援、国営の大規模灌漑計画といった多層的な農業開発が促進された。

III

本書の内容について若干のコメントをしよう。しかし本書の各章（論文）は統一的な体系をなすように配置されているわけではないので、本書の全体についての評論は差し控える。また紙幅の都合上、すべての章を扱うことはできないので、一部の章を取り上げてコメントすることにする。

第1章のコーエン論文は、本書の各章の成果も批判的に摂取し、総合しながら興味深い議論を展開している。「単層式モデル」と「多層式モデル」というジョンストンの提唱した図式（ただしジョンストンは「多層式」ではなく「2層式モデル」といつている）を借りながら、それを応用して分析に用いることで、あるいは「解放」理論という独特の類型化を使って従来の開発政策の問題

点を鮮やかに浮かび上がらせている。

しかしコーエンは単層式モデルと多層式モデルという図式の議論を展開するなかでいくつかの異なる種類の対比をそこに含意させたために、議論が複雑で分かりにくくなっているように思える。この図式には、次の3つの対比が混在しているように評者には思える。(1)小農集中型の農業開発方式対小農に集中しない農業開発方式、(2)一般化された単純なモデル対実験的な、多様なモデル、(3)公正・福祉重視の開発戦略対成長重視の開発戦略。そしてそれぞれが結び付けられて議論されている。つまり、小農集中型の農業開発戦略と、一般化された単純なモデルと、公正・福祉重視の開発戦略とが、結び付けられて議論されている。実際にはこれらは、必ずしも1対1の対応関係にあるのではないし、同じレベルのものでもない。たとえば、(1)と(2)の関係では、小農集中型の開発方式だけが1点集中型の一般化されたモデルではなく、大農場中心の開発方式も同様のモデルであるはずだ。また、小農を重視するという大枠のなかで、実験的に多種多様な開発プロジェクトを実施していくという方式もある。

次にコーエンが2つの重要な不変要因としてあげている人口の動態と軟性国家について。筆者は、単層式モデルの主張とは逆に農村開発の遅れが都市化を促進するのではなく、農村地域への投資の増大こそが都市への人口移動を促すという。筆者は農村での学校教育の普及が都市化を促進したことを例証としてあげている。また筆者は農民自身が農民を他の職業よりも低く見るといった価値観を持っているとして都市化は避けられないという。確かに学校教育についてはそのとおりであるが、それをもって農村地域への投資の影響として一般化できるであろうか。都市と農村の所得格差や雇用機会という要素を無視して、農村への投資や農民の価値観に都市化の原因を求めることは、筆者自身が一種の単層的発想に陥っているように評者には思える。

コーエンは、アフリカの国家が軟性国家であるのは、特定の政権の問題ではなく、不変要因だとしている。しかしなぜそうなるのかという理由は説明していない。この点で第3章のハイデン論文は示唆に富む。

ハイデンのいうモノカルチャーという概念とコーエンのいう単層式モデルには共通性が見られる。2人とも、アフリカの現実の多様性や複雑さ、予測不可能な環境を無視して、ある特定の見方や政策を唯一の解決策として重視する危険性をこれらの概念を使って指摘している。コーエンの単層式モデルの場合、一般化された唯一の解

決策というところに力点があり、具体的には小農集中型、公正重視の政府主導の開発戦略をイメージしているのに対して、ハイデンのモノカルチャーはアフリカ以外の地域からアフリカへ、あるいは上(=中央)からある地域へ導入された見方というところに眼目がある。アフリカ以外の地域で有効性を証明されている理論や技術が環境の異なるアフリカで有効だとは限らないのである。したがってハイデンは解決策としてアフリカの地域的・土着的な自発性、独創力、知恵を重視する戦略への転換を提唱する。いわば内発的發展論である。

評者はこの視点は現在のアフリカの問題を考えるうえで重要であると思う。公共部門の非効率、腐敗というアフリカで広く見られる傾向に対しては、公共部門の役割の縮小と公共部門の運営能力の強化が解決策として提示されている。しかしハイデンがいうように、運営(経営)能力の改善は、官僚や経営者に欧米の経営理論や経営技術を習得させるだけでは達成されないであろう。問題の根源は訓練の不足ではなく、欧米の価値観や倫理観、組織原理に基づいた組織運営がアフリカの環境において有効なのか、という点にあるからだ。またアフリカにおける経済自由化や民営化の真の意義は、民間部門の方が公共部門よりも効率の点ですぐれているということだけにあるのではなく、それによってアフリカ人自身の独創力や組織が認められ、潜在的な生産力が十分に活用されるようになるところにあるのではないだろうか。

地域的・土着的な自発性、独創力、知恵の重視というハイデンの主張は、他ならぬハイデン自身の自己批判になっていると評者は考える。ハイデンは1980年に出版した『ウジャマーを越えて：タンザニア——低開発と小農生産様式——』において、経済発展のためには小農を他の階級に従属させることによって生産力の向上を図らねばならない、と主張していた。そこでは小農は停滞的なイメージで描かれ、小農の内発的な発展の可能性は認められていなかった。ハイデン自身が上からの強力な施策による近代化を提唱していたのである(注1)。

コーエンの論文もハイデンの論文も、その主張の性質からして本来具体的なある地域に根ざした事例によって補強されて初めて、その主張に説得力が生まれるはずである。この点で本書の後半の各論部分にはそのような事例を示す興味深い研究が紹介されている。

ゴールドスミス論文は土着の社会・経済組織に根ざした商業的農業の成功を実例をもって示している。それは汚職や非効率とは無縁の世界である。ゴールドスミスの明らかにした事例は、ハイデンの主張する内発的發展の

可能性を生き生きと描き出している。

ホージェラッドの論文は、われわれがしばしばおかしがちな単純な二分法、あるいは二者択一的発想の危険性を明らかにしている。たとえば大農と小農という二分法である。ホージェラッドの調査結果は、この二分法で見落とされがちな、小農の多様性や複雑さを明らかにしている。しばしば小農や小規模農民として一括して論じられ、その自給自足指向が指摘されるが、実際にはそこには自家消費に必要な量以上に生産する農民も時には自家消費量も生産できない農民も含まれ、その農地規模や経済活動の内容も多様である。

また、自給用生産か市場向け生産かという二分法もある。小農の農業経営、あるいは指向を、このような二者択一的、二分法的発想で見るとはならず、自家消費用の食料作物生産にしろ、市場への販売のための生産にしろ、小農の多角的・多様な経済活動（自給用食料作物生産、販売用食料作物生産、商品作物生産、畜産、非農業経済活動）の中のひとつにすぎないのである。これと関連してわれわれが陥りやすい単純化は、収穫された食料作物は自家消費されるか市場に販売されるという二分法

である。実際には、自家消費量以上の食料作物生産のすべてが市場に販売されるのではなく、ましてや公式市場に販売されるわけではない。ホージェラッドの調査結果が示しているように、収穫された食料作物は、贈与、客をもてなす食事、労働者への現物支給など非市場的な経路を通して農村社会の内部を動く。しかもこのような非市場的な流通は、社会的・政治的意味を持っているのである。

総じて本書は、具体的な、地域に密着した、綿密な実証研究がアフリカ研究において求められていることを示唆しているといえよう。まだわれわれはアフリカの現実をきわめて不十分にしか知らないのである。

〔注1〕 ハイデンの『ウジャマを越えて：タンザニア——低開発と小農生産様式——』については富永智津子氏による書評を参照されたい。『アジア経済』第22巻第11・12号 1981年12月所収。

（一橋大学助教授・前アジア経済研究所地域研究部）

〔付記〕 本書評は、1990年度「アフリカ諸国における商業的農業の発展」研究会の成果の一部である。